
にんぎょひめ

実景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

にんぎよひめ

【Nコード】

N6249S

【作者名】

実景

【あらすじ】

童話の『人魚姫』は悲しい終わり方をしてしまったけれど、キミがくれたこの絵本は……この物語はきっとハッピーエンドになるよね？

幼い頃の『約束』を胸に、羽ヶ崎町にやってきた海波。小さな心の傷を抱える彼女がこの町で出会ったのは、温かくて優しい『仲間』達だった。

prolog

うみのそこ

にんげんではいくことのできない
ずっとずっとふかいところに
にんぎよのくがありました。

にんぎよのくには

それはそれは

うつくしいひめが
いました。

ひめはおとなしく

うたごえのうつくしい

まだおさないしょうじょです。

いつもはうみのそこのおしろで

うたをうたってすこす

ひめですが

きょうはめずらしく

だれにもないしよで

かいめんのほうへ

あそびにいつてしまったのです。

もちろんにんげんに

すがたをみられては

たいへんです。

ですがひめのはきこえたのです。

うみのうえでひびく

うつくしいねいろを……

うたうことがだいすきなひめ

「こんなにきれいなねいろ

うえにはなにかあるのかしら」

そばにいつておとだけを

きくつもりだったのですが

とうとううみのうえに

かおをだしてしまいました。

ひめのめにうつったのは

それはそれはおおきな

かいぞくせんです。

ふねのうえではようきな

おんがくをながしながら

たくさんのおとこたちが

おどつたりうたつたり。

けれどひめがきいたのは

このおとではありません。

もっとやわらかくて

やさしいねいろです。

ひめはかいぞくせんに
ちかよってみみを
すましました。

するとやはりきこえました。

やさしくこころに
しみわたる
そのねいろが……。

「なんてきれいなおと
いつしよにうたいましよう」

ひめはかんだうのあまり
そのねいろに
じぶんのうたを
かさねました。

うつくしくやさしいねいろと
ひめのあいらしいうたごえは
なみのおととともに
うみをあたたかく
つつみました。

そのときです。

「おい！ にんぎょがいるぜ！…！」

「つかまえる！」

「にんぎよはたかくうねる！」

そうです。

ここはかいぞくせん
のすぐちかく……。

ひめのうつくしいうたごえを
ききつけたかいぞくたちが
ひめをとらえてしまったのです。

けれどふしぎと

ひめはこわくありませんでした。

かいぞくせんの中かにいけば
あのねいろのひとに
であえるはずだからです。

かいぞくたちに
つれられてきたのは
うすぐらいうやでした。

さいわいにも
すいそうなかに
いれられているひめは

くるしくはありません。

そしてそのろうやのなかには
ひとりのしょうねんが
いました。

さびしそうなひとみを
しています。

「あなたはだあれ？」

ひめはたずねました。

しょうねんはなにも
こたえてくれません。

「わたしはにんぎょひめ
きれいなねいろがきこえたから
そのひとにあうために
きたのよ」

ひめはめげずに
えがおでしょうねんに
はなしかけつづけます。

そしてよるになりました。

くらしいろつやは
もっとまっくらになってしまいました。

もうしょうねんのすがたも
みえません。

おさないひめは
だんだんとこわくなってきました。

きつとおうさまも
ひめをしんぱいしています。

おねいさんたちも
ひめをさがしています。

けれどみつけてもらうことは
できません。

ここはかいぞくせん
なのかなのです。

にんぎよである
ひめのかぞくは
みずのないところでは
いきていけないからです。

ひめはかなしくなりました。

さきほどまで
しょうねんにむけていた
えがおはなみだにかわりました。

かなしくてかなしくて

とつとつこえをあげて
なきだしてしまった
そのときです……

「なかないで」

ちいさなこえといつしよに
あのねいろがきこえてきました。

やさしくあたたかいねいろは
ひめのなみだをとめてくれました。

なみだがえがおにかかります。

なきこえはうたごえにかかります。
そうです。

あのねいろはしょうねんかなでる
バイオリンのおとだったのです。

「あのねいろはあなただったのね」
ようやくよるがあけたころ
ひめはまたえがおで
しょうねんにはなしかけました。

しょうねんはこたえるかわりに
ちいさくうなずきます。

「ねえ、あなたはどのようにして
ここにいるの？」

ひめはうれしくなって
またはなしかけます。

「ぼくは……つみびとだから」

しょうねんはちいさなこえで
ゆっくりとこたえました。

「つみびと？」

けどそんなきれいな
おとがでるんだもの

あなたはきつとやさしいひとね
「

おさないひめには
しょうねんのいうつみびとの
いみがわかりません。

ですがひめにはわかります。

ひめをなくさめてくれた
このしょうねんは
やさしいひとなのだ……。

「……ありがとう」

しょうねんははずかしそつに
おれいをいうと
またバイオリンを
かなではじめました。

ゆったりとした
おちつくおとです。

ひめはいつしか
ねむってしまいました。

ひめがめざめたのは
しょうねんの
うでのなかでした。

あちこちで
おそろしいかいぞくたちの
どなりごえがきこえます。

「……ここはどこ？」

ひめはじぶんをかかえてはしる
しょうねんにたずねます。

「きみを、うみにかえしてあげる」

「うみに……？」

「きみになかれるのは

……いやだから」

しょうねんははしります。

おいかけてくる

かいぞくには

おちていたカップをなげて

まえからきたかいぞくは

たいあたりをして

ひめをおとさないように

けがをさせないように

まるでおうじさまのように

ひめをまもりながら

しょうねんはとうとう

ふねのかんぱんまで

たどりつきました。

うみはもうすぐそこです。

「ありがとう」

うみをめにしたひめは

えがおでおれいを

いいました。

しょうねんも

えがおになります。

そしてひめはうみにとびこむまえに

しょうねんにたずねました。

「あなたのおなまえは？」

「……ぼくは」

しょうねんがこたえようとした

そのときです。

おおきなおおきな

じゅうせいがひびきました。

しょうねんがひめのほうに

たおねこたできます。

そのひょうしに

ひめはくずれるやうに

うみへおちてしまいました。

しょうねんもいっしょです。

ひさしぶりのうみ。

ひめはうれしくなりました。

けれどひめはしっています。

にんげんはうみでは
いきていけません。

なのにしょうねんは
どんだんおくふかくに
しずんでいっってしまう。

「まっ……！」

ひめはおいかけます。

しょうねんがのこしていく
まっかなあとを
おいかけます。

やがていちばんおくそこ
やわらかいすなに
たどりついたところで
ひめはしょうねんに
おいつきました。

けれどいくらゆすつても
いくらこえをかけても
しょうねんはうごきません。

じぶんをかかえてくれたときの
あたたかさは
もうかんじません。

「ねえ……ねえ！ おきて！
またあのおとをきかせて？
またいつしよにうたって！
おねがい……
おねがい！！」

ひめはなきさけびました。

けれどやはりしょうねんは
めをさましません。

そんなひめのなきこえを
ききつけて

おつさまがすがたをあらわしました。

「ひめ！！ さがしていたぞ」

けれどおつさまのこえなど
ひめにはとどきません。

もうつめたい

しょうねんのからだを
ひめはだきしめつつけます。

ひめのつよいかなしみに
おうさまはこまり
そしてこえをかけました。

「そのしょうねんを
いきかえらせたいか？」

「はい！」

ひめはまようことなく
うなずきました。

「だが、もうしょうねんに
あうことはできんぞ？
それでもよいか？」

ひめはすこしだけ
まよいました。

けれど、もうあえなくても
いきてほしいと
そうねがったのです。

「はい！」

わたしはこのひとに
いきていてほしいのです。

また、あのねいろを
かなでてほしいのです」

おうさまはやさしく
うなずきました。

そしてひめのあたまを
なでると

あいているで
しょうねんのあたまにも
てをおきました。

するとどうでしょう
まばゆいひかりが
あたりをつつみ
しょうねんがめを
さましたのです。

「……ぼくは」

しょうねんはもうろうとする
あたまであたりをみまわしました。

「はやくちじょうに
あがりなさい。
きみはながくはうみには
いれないのだから」

そんなしょうねんに
おうさまはやさしく

いいました。

そのおうさまにだかれて
ひめはやすらかに
ねむっています。

「ひめは……」

「いきとおるよ

しょうねんのおかげだ」

おうさまのことばに
しょうねんはあんしんしました。

ですがつきにでてきた
おうさまのことばは
とてもざんこくなものでした。

「だが、ひめにもう
しょうねんのきおくはない。

もうきみとあつことも
ないだろう……」

そうです。
ひめはじぶんのきおくとひきかえに
しょうねんのいのちを
すくったのです。

「さあ、わたしがまちまで

おくつてあげよう」

ぼうぜんとするしょうねんの
からだをおうさまがうみだした
ひかりがつつみました。

しょうねんのからだは
ゆっくりきえていく
そのせつな
しょうねんはいいました。

「ぼくは……きつとひめを
むかえにきます」

「けれどしょうねんのは
おぼえておらんぞ？」

「またバイオリンから……
いつしよにうたうところから
はじめます」

そしてもうからだの
きえてしまったしょうねんは
さいごにねむるひめに
くちづけをしました。

「かならず、またあえるから」
そしてしょうねんは
きえていきました……。

「あれえ？ この絵本やぶけてるよ、 くん」

ひろい草原で絵本を広げている幼い少女が、目の前に居る少年に尋ねた。確かに続きがあるはずのその絵本には続きが無いのだ。

そしてまるでむりやりちぎったような跡だけが残っている。

「うん、あのね海波ちゃん」

少年は寂しそうに笑いながら口を開いた。

「僕、遠くに……引越すんだ」

「……え？」

突然の少年の言葉に、海波と呼ばれたその少女は驚いて顔を上げた。見開かれたその大きな瞳には、大粒の涙が溜まっていく。

「なんで……？ やだ、やだあゝ」

そしてとうとうそれは溢れ出し、下に広げられている絵本に大きな染みを作ってしまった。

「また、あえるから」

不意に少年が言った。絵本の『しょうねん』とまるで同じ台詞を、少年は優しい笑顔で言ってみせた。その透き通るような笑顔に思わず海波の涙は止まった。

「僕が行くのは遠い遠い所だけど……必ずまた会いに来るよ」

「だって、海波……忘れちゃうかもしれないよ？ くんのこと

……」

「僕は覚えてるよ、海波ちゃんのこと」

「……ほんとう？」

再び泣き出しそうな海波の頭を優しく撫でた少年は、立ち上がり自分の手荷物から大きなケースを取り出した。そして革で作られた高そうなケースの中から出てきたのは、まだ真新しいバイオリンだった。

「僕、バイオリン始めたんだよ。まだ下手くそだから聴かせられないけど……でも約束するよ。海波ちゃんに次会うときは、絶対に『しょうねん』よりも上手になってるって」

「そしたら海波に聴かせてくれる？」

「うん、約束」

「そしたらね、海波大きくなったら『はねがさき』って町に行くの、決めるの」

「はねがさき？」

「海が綺麗なところ！」

海波は以前見たテレビで見た『羽ヶ崎』という町の海を思い出した。見たことの無いくらいに透き通ったその海は、孤児院で育ててきた海波が唯一持っている母の写真に写っている海とそっくりだったのだ。

「はねがさきだね、うん、僕もそこに行くよ。絶対」

嬉しそうに語る海波を見て、また笑顔になった少年は海波にそっと口付けをした。

「その時に、絵本の続き、一緒に読もう」

そして、少年とはそれ以来九年間音沙汰は無い。海波も高校に上がる歳になり、少年に対する記憶はもうほとんど無かった。

かすかに覚えているのは少年の優しい声と、羽ヶ崎でまた会ったという口約束だけだった……。

春の麗らかな陽気の中で、冬野ふゆのみなみ 海波は空を仰いだ。

「良い天気で良かったあ」

ここは海の美しさが自慢の羽ヶ崎町はねがさきちょう。海波は、私立桜華高等学おうが校に入学するために、日本の都市である東京から自然豊かなこの町にやって来た。

当然の事ながら一人暮らしなど出来るはずも無く、今は羽ヶ崎高等学校の近隣に建てられているという寮宅を目指しているのだが、一向に見つからない為に小三時間ほどここらを彷徨いているという訳だ。

もしも今日の天気が雨だったとすれば、多少は暖かくなって来たとはいえ今頃体を冷やして風邪を引いていただろう……。風邪ならまだ良い、虚弱体質とでも言うのだろうか海波は生まれつき人よりが体が弱く酷い病気を引き起こしやすいのだ。

そのせいもあり、海波が二歳の頃から暮らしていた施設 木苺園の園長には遠くの羽ヶ崎高等学校への入学を猛反対されたのだが、穏便な性格の海波が珍しく反抗したのだ。

何故そこまで海しか無いこの羽ヶ崎町を選んだのかは、海波自身にしか分かるはずもない。そしてあそこまで強く願われては園長に止めることは不可能だった。

頻繁に手紙を出すことと、年に二度は姿を見せる事を約束に海波を送り出した。

「ここに……居るよね。約束したもん」

海波は胸に抱いていた古びた絵本を太陽に透かすように空に掲げて嬉しそうに微笑んだ。

かならず、あえるよ

ふと幼い頃の数少ない記憶に鮮明に残る『約束』の言葉が耳を掠めたその時、

「待った〜？」

「……………へ？」

見知らぬ男が突然海波の肩を抱いてきた。

「あの……………」

どこからどう見ても知り合いでは無いその男に、海波は頭に思い切り疑問符を浮かべて声を掛けるも相手は何も言おうとはしない……むしる肩を抱くその腕により力がこもったような気すらする。

生まれてこのかた男性とここまで密着したことは無く、それに加えて少し人見知りの気がある海波は、もう解放されることを願って固まる他無かった。

そつと見上げた男の容姿は、一言で言えば整ってはいた。オレンジと茶色が折り重なったような曖昧な色の髪は少し長めで肩に掛かっている。アーモンド型の悪戯そうな瞳は来た方をしきりに気

にして眺めている。鎖骨を見せたスカルの絵と英語のロゴが入っているトップスに程よいダメージの入ったジーンズ、それに付いているシルバーのチェーンに指にはめられたら敵つい指輪……とても正統派美少年とは言い難いが、それでも彼のような人がモテることは海波も知っている。

もつとも、海波はこの手の男子はあまり好きでは無いうえに微妙に香る香水の匂いも得意では無いのでこう密着されるのは気分が良いものではない。

「あの……く、くくく、くつつき過ぎ……だと」

「しっ、ちよ〜つと話し合わせてね〜」

「えっ？ あの……」

予想外の男の優しげな笑顔に不意を突かれて一瞬海波が言葉を失ってしまったその時だ。

「あつ！ 明くんあき見つけた〜っ」

鼻に掛けたような甘ったるい声とともに一人の少女が現れた。

ウェーブの掛かった酷く痛んで見える長い金髪にバサバサと風でも起きそうな濃い睫……夏でもないのにこんがりと焼けたアフリカ人みたいな肌。海波の頭に浮かんだのは、まだ小学校低学年辺りでテレビで良く聞いた『マンバギャル』という単語だった。

見た感じ流石に当時のように化粧品として水性マジックを使う事はしていないようだが、それにしても似ている気がした。

「やあ真弓ちゃん」

「優奈よ！」

「そっだっけ？」

名前を間違えた事を恥じるでもなく詫びるでもなく、軽薄に笑いながらも明は海波の肩を解放しようとはしない。

「今日はうちと遊ぶ約束したじゃん！ 誰その子！？」

「誰って……彼女だよ俺の」

明は相変わらずの軽薄な笑みのままに、優奈に短く言い放つと海波の肩を持ったままに身を翻してスタスタと歩き出してしまった。

もちろんこの土地に来たばかりの海波に明の事など分るはずも無いし、名前だつて先ほどの少女が呼んでいたからこそ知れたのだ。それで突然彼女だの何なのと紹介されては困る……流石の海波も無理やり足を止めて、堰を切らした様に文句を言った。

「あの……！ 彼女なんて……困ります！ 貴方の事なんて知らないし……」

「冬野海波ちゃん」

「え？」

「俺は君の事知ってるけどなあ？」

ニコニコと顔に笑みを湛えたままに明は言う。

海波の心臓が跳ね上がった。腕の中に抱えている古びた絵本が急に熱を帯びた気がして、思わずそれを抱える腕にまるで厚さが無くなってしまふのではないかと思うくらいに強く強く力を込めた。

「もしかしてこの絵本のこと……」

「いやあくまさが歩夢ちゃんあゆむの海波ちゃんが、こーんな片田舎に居るなんてびっくりびっくり」

「歩夢ちゃん？」

絵本を差し出そうと上げた手をそのままに、海波は突然出てきた名前に首を傾げた。名前だけでは男か女かの判別はつき難いが、口ぶりを見れば明とは親しい仲なのだろう。

「ああ、歩夢ちゃんは海波ちゃんの……」

「あれ明？ おーいつー！！」

「噂をすれば……ってやつだな」

ようやく訪れたと思つたまともな会話をかき消すように、元氣の良い少年の声が辺りいっぱいに響いた。真昼間の為、ただの並木道といえど人はそれなりに居るのだが、その声の主は海波にもすぐ分つた。

茶色く焦げた外跳ね気味の短髪にまだ四月前半だというのに半袖七部丈のズボン……見るからに涼しげな格好をした少年が明の名を呼びながら手を振り駆けてきているからだ。

「こんなところで何してんだよー」

少年は海波と明の目の前まで来ると、乱れた呼吸を整えつつ明の顔を見上げて尋ねた。少年の背丈は海波より少し大きい程度で百六十程度……百八十近いだろう明と並んでしまつと、まるで子供と大人の様である。

「俺は、この子とデート」

「え！？ だから海な……」

「わー！？ ふ、冬野海波ちゃん!？」

「はっ、はい!？」

名前を呼ばれて思わず返事をしてしまった海波も、その後は不思議そうに少年の顔をまじまじと見た。やはり明と同様に見覚えは無い。

果たして自分はそこまでこの羽ヶ崎において有名なのだろうか：

…海波は思考を巡らせて考えるが、そもそも名前を知っていただけで訪れるのも初めての土地なのだ、答えなど見つかるはずも無い。

「このチビがさっき言つた歩夢ちゃんだ。んで、中学の頃から海波ちゃんの大ファンつてわけ」

「っわあああ!!」

思い悩んだ表情の海波に気付いたのか、明が助け舟を出すように少年の説明を始めた。歩夢と紹介されたその少年は一気に頬を紅潮させると明と海波の間に入り込み、人懐っこく笑つて見せた。

「おっ、俺、なかにあゆむ中谷歩夢！ 十五歳の明日っから高一！ 家族は父さん母さん……」

「おいおい歩夢ちゃん？ 海波ちゃん困つてるって」

「えっ!？ あ、わり……興奮……じゃなくて！ 緊張しちゃって」

「……あの、海波……貴方に会つたことありますか？ もしかしてこの絵本……」

先程明にしようとした時と同じように抱えた絵本を歩夢の目の前に突き出した。それと同時に海波の目の前には、八つ折にされたような痕のある少し古びた紙切れが差し出された。

「え、これって」

一瞬突然のことに何なのか分らなかった海波も、それが『自分』だと言うことが分ると紙切れを持ってしているスラリとした指の持ち主、歩夢の横に居る明を驚いたような瞳で見つめた。

それは海波の過去だ。無邪気に芸能界を目指して、運良く人気のあるティーン雑誌の専属モデルとしてデビューを飾った……おそらくその時の記事だろう。

確かに海波にとってあの頃は楽しかったのも事実で、一番の目標だった芝居にも手が届く寸前だった……けれど学校というのは時に残酷だ。

もともと引つ込み思案で友達も少なかったし、大人し過ぎた為に注目を浴びることも無かったが、やはり『芸能人』の仲間入りを果たしてしまえば事情も変わってくる。今まで話したことも無かった人から話し掛けられたり、時には告白までされた。

もちろん海波だって人並みに憧れの人は居たわけだから軽々しく付き合うなんて事はしなかったが、女子という生き物は面倒臭い位に嫉妬深い生き物で、海波の人气が上がるのと平行して嫌がらせを受けることも増えた。

あまりの辛さに耐え切れなくなり、デビューを飾った二年後……中学三年生に上がったときには主演映画を一本公開したすぐ後、惜しまれながらも引退してしまった。

それでも嫌がらせが止む事は無かったのだから、海波は結局全てを失っただけだった。

「ありやく？　だめだって可愛い子がそんな暗い顔しちゃ！　はい笑って笑って〜」

あまり愉快じゃない過去を思い出してしまい自然と俯いてしまった海波の機嫌を取るように声を掛ける明だが、次の瞬間その笑みは歩夢の手につて歪められてしまった。

「おい明！　その切抜き！！」

歩夢は怒りに打ち震えている手で明の顔を掴みながら半分怒鳴る

ように声を上げた。本気で怒鳴りつける事が出来ないのは海波が目の前に居るせいだろう。

「歩夢ちゃんの生徒手帳ですよ〜中学校の頃の」

まるでなんて事もないように歩夢の手を払った明は、ジーンズのポケットから青い手のひらサイズの手帳を取り出した。上部には中学の校章のような物が掘り込まれていて、所々に薄汚れの目立っている。

「卒業式から見当たたらねーと思ってたら……!!」

「いやあ〜、歩夢ちゃんからかうネタになるかな〜って思ってさあ。

ま、こんな絶好の機会があるなんて思わなかったけどなあ」

「っだー!! だから『ちゃん』は止めるっていつつも言ってたんだろぅが!!」

「だあ〜って歩夢ちゃんからかうと面白れ〜んだもん」

「人を玩具にすんな!!」

「あの……喧嘩は駄目です!」

まるで殴り掛かるように拳を握る歩夢の手を、今まで傍観していた海波が握った。本人からすればただ単に目の前で争う姿など見せられたくなかっただけなのだが、歩夢からすれば『憧れの女の子』に突然なんの前触れもなしに触られたのだ。

「いや、お、俺……ごめん用事!!」

ほんの一瞬の思考停止の後、茹蛸のように一気に顔を紅潮させるとしどろもどろの口調で言葉を言い残して、来た時の数倍の早さでどこかへ行ってしまった。

「あちゃー、歩夢ちゃんたら次いつ会えるか分んないってのに馬鹿だね〜」

「み、海波……何かしましたか?」

「う〜ん、しちゃったっていやあしちゃったんじゃね〜?」

「そんな……」

冗談のつもりだった自分の言葉を素直に鵜呑みにした海波がよっぽど可笑しかったのか、海波にばれない様に声を殺して一頻り笑っ

た明は、やがて一番気になっていたことを口にした。

「そっぴや海波ちゃん、こんな時期にこんなところで何してるワケく？ 旅行……なワケねえよな？」

この質問に海波もようやく自分が寮を探して迷っていたということとを思い出して、顔を上げた。

「あの……実は迷ってて、桜華高校の寮に行きたいんですけど」

「桜華！？ ってことはまさか海波ちゃんこの町に越してきたっつーこと？」

「はい、明日から桜華高校に入学……」

「はあ！？ 桜華って男……あ、そっぴや共学になったんだっけか」「だん……？」

「いやいやこつちの話こつちの話」

海波の疑問符を打ち消すように笑顔を見せると、明は再び最初の時のように海波の肩を抱いた。 どうやら明はスキンシップが好きな様である。

「んじゃ、いつちよご案内しますかね」

「え？ 連れてってくれるんですか!？」

「差し詰め姫を送るナイト様ってか」

「ありがとうございますっ！」

突っ込んでほしくて言った『ナイト』等の単語に触れもせず、無邪気に御礼を述べる海波に苦笑いを浮かべながらも、明は海波の肩を抱く手を離して少し前を歩き出した。

ここらでは女たらしと有名な明も、こつちも純粹で疑うという事をまるで知らない海波と周りに寄ってくる女達とを同じように扱うのは気が引けるのだろう。 それにもうひとつ明には寮へ行く上でこんな場面を目撃されては面倒くさい女がいるのだ。

そしてようやく明に解放されこつちそりと安堵の息を漏らした海波も、嬉しそうに胸に抱える絵本を一瞬見てから明の後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6249s/>

にんぎょひめ

2011年4月23日13時10分発行